



【フロウ】 Flow



福島県奥会津の暮らしに息づく伝統文化は、只見川・伊南川とその支流に集約される豊かな水の流れの中で育まれてきました。Flowは、奥会津の宝である「豊かな自然・伝統文化・ここで生きる人」を、皆さんと見つけていく情報紙です。

只見の豊かな自然の恵みと
温かな風合いの草木染めに



Okuazu news Flow

奥会津をつなぐ人々 —只見町—

広大なブナ林が広がり、人と自然が共生する只見町。「ぶないろくらぶ」は、その恵みを生かした草木染めを楽しむ女性3人のグループだ。ブナの落ち葉をはじめ、桜、タンポポ、ヨモギなど、四季折々の植物でつくる草木染めは温かみがあり、只見町の自然の豊かさと美しさを伝えてくれる。

ブナの落ち葉から生まれる
やさしい色合いの絞り染め

やわらかなベージュ色に薄茶色、淡いオレンジ色、薄墨色。一つひとつ微妙に色合いが異なる絞り染めの染料は、只見町に広がるブナ林で拾った落ち葉。その名も「ぶなの葉染め」だ。「媒染の種類によって違う色に仕上がるんですよ」と酒井勝子さん。「年によっても色が違うんです。ブナの実がたかさんなった年は色が全然つかなくて大変だったよね」と本多一恵さんが言う。「そうそう、あれほど色が違うとは思わなかったね」と鈴木サナエさんが続ける。

息の合った会話が続く3人は、只見町の草木染愛好会「ぶないろくらぶ」のメンバーだ。会発足のきっかけは、2014年6月に只見町がユネスコエコパークに登録されたこと。「ユネスコエコパークは自然と人間社会の共生が目的です。経済活動もしまじょう」ということで、『自然首都・只見』伝承製品の認証制度が始まりましたとサナエさんが説明する。伝承製品のひとつとしてブナの葉で草木染めをしてみないか。そんな相談を受けた一恵さんが近所に住むサナエさんと勝子さんを誘い、3人で始めることになったという。

「元々興味はありましたが、3人ももったたくの素人だったので、講師の先生に教わって一から草木染めを勉強しました」と一恵さん。その後試行錯誤を繰り返して、ぶなの葉染めが完成した。今では手ぬぐい、巾着、スカーフなど多彩な商品が誕生し、只見町の豊かな自然の恵みを生かした伝承製品として喜ばれている。

左頁へ続く



こちらも
チェック!

奥会津をつなぐ人々

— 只見町 —

四季折々の多彩な草木染め 3人でのおしゃべりも楽しみ

只見町はかつて養蚕が盛んで、手織りと草木染めの文化があったという。「田子倉出身の祖母が手織り・手染めした帯揚げを形見にもらったこともあり、草木染めの伝統を復活させたいという思いがありました」と、サナエさんはぶないのくらぶ発足当時を振り返る。現在はブナの葉以外に桜、タンポポ、スギ、ヨモギ、クズ、アカソ、ミズヒキなど四季折々の植物を使い、多彩な草木染めを行っている。もちろん、材料はすべて町内で採取したものだ。また、自分たちで栽培したアイで生葉染めを行ったり、ワラビやユビソヤナギなど只見らしい草木染めにも挑戦している。



小枝や苔などを取り除きながら、晩秋に拾って乾燥させたブナの葉をハサミで切る。繊維を断つように切ることで色が出やすくなるのだそう



ブナの葉を煮出して一晩置いた染液を火にかけ、絞り染めの下準備をした布を入れる。色むらがないよう、かき混ぜながら煮るのがコツだ



ぶなの葉染め(写真右側)のほか、桜、ヨモギなどで染めた多彩な商品は、『ただみ・ブナと川のミュージアム』などの町内の施設で購入できる

「私たちが幸せなのは、宝の山に住んでいること。都会の人は材料を買わなくちゃいけないけど、私たちは宝の山から恵みをいただいている染めることができる。本当に幸せだと思います」と、勝子さんが3人の思いを代弁する。「長い冬を越えて桜が咲き出したりする、タンポポが咲き出したりすると、それだけで嬉しくて、少し命を

いただいた染めてみようかなとなります。只見の四季折々の自然に身近に触れられることが草木染めの魅力です」と、一恵さんも続ける。

桜は花が咲く前の枝、タンポポは花、そしてブナは落ち葉と、材料によって使う部分はさまざま。ブナの落ち葉は10月末から霜が降りるまでの間に大量に拾い集め、乾燥させた葉を使って一年を通してぶなの葉染めを行う。色がよく出るようハサミで葉を切るところから始まり、寸胴鍋で葉を煮出して染液をつくり、一晩置いた染液で布を煮る、鉄やタンなどの媒染液に浸ける、そしてまた染液で煮るといった作業を繰り返し、ようやく染め上がりとなる。時間も手間暇もかかるが、3人とも「楽しい」と口を揃える。「女三人寄れば」ってあるでしょう。「文殊の知恵」もあるし、3人が集まるといろんなアイデアが湧き出てくるんです。作業の合間のおしゃべりとお茶飲み、これが一番の楽しみかな」と勝子さんが笑う。

ぶないのくらぶ

本多一恵さん(写真左)、鈴木サナエさん(同右)、酒井勝子さん(同中央)が2015年11月に立ち上げた草木染め愛好会。ブナの落ち葉を染料にする「ぶなの葉染め」をはじめ、只見町で採取した四季折々の植物で草木染めを行う。多彩な商品が「自然首都・只見」伝承産品として認定・販売されているほか、ぶなの葉染めのワークショップも行っている

ぶないのくらぶ(本多さん)

電話:090-4630-0115
メール:tk2335@cpost.plala.or.jp



読者の声

- すごいですね。前沢曲家集落、日本の原風景。大規模な観光誘致を行わず、住民の暮らしを守る。来年にも河井継之助記念館を訪問時にひっそり行ってみたいものです。(岡山県倉敷市・NHさん)
- Flow、お送りいただきありがとうございました。奥只見のダム建設を思うと、温泉宿で調査していた故父を思い、現在の線状降水帯の水とは異なる河川状態と思われ、地元の人々も苦勞されていたことに感謝申し上げます。風土記で「シラドーリ(白鳥)」の記載があるのは新発見です。(東京都板橋区・TMさん)
- 先日、吾妻山でも初冠雪となるなど、急に寒くなってきました。毎号のFlowを楽しみにしています。文章もやわらかく、写真もきれいです。(福島県伊達市・SHさん)

編集
問合せ先

新・奥会津だより「Flow」編集部(株式会社日進堂印刷所内)
〒960-2194 福島市庄野字柿場1-1
TEL:090-6852-0953(専用電話) FAX:024-594-2041
Eメール:flow@nisshindo.co.jp

ご意見・ご感想をお寄せください。
奥会津だよりの定期購読を希望される方は、編集部まで、発送先(ご住所・お名前)をお知らせください。個人情報の取扱いにつきましては適切に管理を行っています。詳しくは、日進堂印刷所のホームページをご覧ください。



自然の中に
暮らすいとなみ、
100年先のみらいへ。



最新情報は
ホームページで
ご確認ください。

只見川電源流域振興協議会

〒968-0006 福島県大沼郡金山町大字中川字上居平933番地
奥会津振興センター内
TEL:0241-42-7125 FAX:0241-42-7127
Eメール:tdrsk@okuaizu.net

只見川電源流域振興協議会の主催・共催事業については、最新情報をホームページで随時公開しています。
本紙は電源立地地域対策交付金の事業より作成されています。



掲示板や壁新聞などにご活用ください。

ただでん 掲示板 vol.8

只見川電源流域振興協議会からのお知らせ

奥会津んめえ!
すんげえ!
まるっと市 in
コラッセ
ふくしま

出店者募集中!



奥会津7町村の魅力をまるっとお届けする物産イベントを下記により開催します。出店を希望される方は、令和5年1月13日(金)までに本協議会へご連絡ください。

参加条件

奥会津地域内に拠点を持つ事業者

その他

厨房が使えないため、現地調理不可です。
出店ブース内での保温目的の電子機器使用は可能ですが、事前申請が必要です。

日時 令和5年2月3日(金)9:30~18:00
2月4日(土)9:30~17:00

場所 福島県観光物産館
(福島県福島市三河南町1番20号
コラッセふくしま1階)

【お問い合わせ】

只見川電源流域振興協議会
担当 木村
TEL:0241-42-7125
(平日8:30~17:15)
FAX:0241-42-7127
MAIL:tdrsk@okuaizu.net



令和の奥会津風土記

～むらをあるく～

南会津町木伏を歩く

菅家博昭プロフィール 会津学研究会 菅家 博昭

1959年生まれ、昭和村在住、花農家。会津学研究会代表、昭和村文化財保護審議会委員長を務めるなど、会津地域を中心に調査を続けている。著作に『芋(からむし)～地域資源を活かす生活工芸双書』『暮らしと繊維植物』など。



右から神社総代の馬場洋一さん、木伏区長の土橋一徳さん、五十嵐文紀さん、菅家

秋晴れの日、かつて南郷村であった木伏を歩いた。伊南川の東岸に木伏集落が位置し、上流には古町がある。対岸は旧伊南村青柳で、戦国時代から近世初期の史跡である久川城跡があり、福島県が発掘調査を行った。信州の真田家文書の分析を通して会津若松と上州(群馬県)、信州(長野県)、大坂(大阪府)を結ぶ重要な街道であったと指摘する佐藤啓氏(福島県文化振興財団職員)は、久川城を伊南城と呼ぶ(『流域・第二号』二〇二二年四月刊)。

当地には会津と群馬県を繋ぐ沼田街道が通る。拠点の古町、続く木伏、山口、対岸の小塩、青柳と、政治と交通の要衝である。奥会津博物館の渡部康人氏によれば、「沼田街道」は明治期からの呼称であるとのことだった。

木伏は、過去に民俗学的な調査(『山村習俗調査報告書』一九八六年)が行われている。福島県教育委員会が県立博物館を準備するための調査地に木伏を選定している。

当時の調査員であった佐々木長生氏(元福島県立博物館主任学芸員)に話を聞くと、「旧南郷村には民俗学の安藤紫香さんがいて、木伏には大正十年生まれの五十嵐直一さんという優れた地域文化の伝承者がいたので調査地となり、盟友の湯川洋司さんも加わった。湯川さんは小塩や只見町布沢をすでに調査されていた」という。

今回の「むらをあるく」では、区長の土橋一徳さん(昭和三十一年生)から、神社総代の馬場洋一さん(昭和十九年生)と五十嵐文紀さん(昭和二十三年生)に声がけしていただき、三名で木伏を案内してくださいました。文紀さんは前出の五十嵐直一さんの息子である。

『新編会津風土記』では、木伏村は古町組に属し、組の概要には「居民蕎麦・芋麻を植え蚕を養て生業を資く」「衆山四面に重畳し嶺峻く谷深し、漁漁採薪の便よく用水また乏からざれども(略)春雪消融するあいだ洪水の害あり」と記されている。

木伏村は家数四十八軒。八竜神社と天神社、愛宕神社が記載されている。また唐倉山図が掲載され、現在は無くなった長専寺は旧太子守宗、薬師堂、菊地氏の館跡が記載されている。この木伏館は愛宕様のある標高七四〇mの山頂であると『福島県の中世城館跡』(一九八八年)は比定している。

1 おがみ 於加美神社

風土記の八竜神社は明治五年に於加美神社と改名した。それまで木伏の鎮守であったものが、木伏・青柳・大橋・大新田・水根沢の総社となったことを記念し改名したという(『山村習俗調査報告書』)。

沼田街道沿いの大正十四年に建てた標柱「村社」部分には戦後にセメント充填で字消しが行われた。各地の郷社が字消しを行っており、これはGHQの指示と言われている。



標柱上部の「村社」部分はセメントで消されている



於加美神社石段

神社の参道から石段にさしかかるとき、洋一さんから「ここはママシ(蛇)が多いところですから、気を付けて下さい」と言われた。石段、神社の基壇等石組みが多いので、そこに暮らしているのだらう。また江戸時代は蛇体がご神体と言われたこともあったようだ。



境内には九月五日の祭礼で、「修拔」に使用された四柱には、和紙とクロマツの枝を挟み込んだ注連縄が張られていた。

拝殿内の壁に貼られた板の記録に、昭和村出身の木羽職人・栗城利の記名があった。昭和村下中津川の本名清喜に弟子入りし、その後山口在住となった職人である(『南郷村史民俗編』一九九八年)。大工をはじめ石工など神社建設を担う職人の参集範囲がわかる。

木伏の神社の特徴は、結婚・家の新築・伊勢参宮などを記念し神社に寄付を行っている。文紀さんが持参されたファイルにはその明細が記されていた。この神社のある斜面は子ども達のスキー場であった、と案内者らは語る。寒いと手がかじかむので、「手なめなめ」遊んだという。「寒いとき口のなかに指を入れると温かくなるのだ、皆そうしていた」という。



拝殿内に貼られた木札

2 土蔵



郷倉

伊南川流域の土蔵の特徴は、屋根の勾配が急なことである。雪が落ちやすいため、三名の方異口同音に言われた。木伏の民家は曲り家(厩中門造)が多く、かつて八十里越を歩いて来た越後大工が建てた」と曾祖母(明治十一年生)がよく話してくれたと一徳さんは説明された。

3 オアタゴサマのぼり



愛宕山を望む

愛宕山の山頂には愛宕神社があり、「オアタゴサマ」と尊称している。昔、子どもが毎朝、走って山頂まで上り下りしたという。現在はその路は敷になつている。唐倉山の修験に関する雨乞いに木伏の青年らが登頂するので、そうした健脚を養成する意味があったのだらうか？

4 石灯籠

文化七年(一八一〇年)の記名がある御神燈。現在も口ウソクを灯す日があるという。

木伏は「ヲ(麻)作りが盛んだった」といい、畑から収穫したヲを切って大きな釜でゆでた、案内してくださった三名はそれぞれに記憶されている。しかし許可制になりヲの栽培は無くなった。こうした多様な生業の経済活動の結果が現在に残る木伏の石造物として残っていると思う。



石灯籠

5 薬師堂

薬師堂の正面には「唐倉山」の掲額があり、鰐口には小さな穴が貫通している。一徳さんは「戊辰戦争(一八六八年九月)の時に出来た弾痕です」と語る。鰐口の記名は明和七年(一七七三年)。



薬師堂



上部に戊辰の弾痕が残る鰐口



地藏菩薩

「むらあるき」は新型コロナウイルス感染症の時代でもあり、歩く道の周囲に見えるもののみを、『新編会津風土記』と重ね合わせて考察することを継続してきたが、今回初めてそこで暮らす人びとの案内で歩いた。見えなかったものは、「火の番」の回覧や、「講ごと」が継続され行われていることだ。



堆肥用にカボチャを乾燥

木伏に暮らす皆さんにお聞きしたいことが増え、雪が降った農閑期の再会を約束した。

集合場所となった集会所脇では、「ぼかし(堆肥)」のためにカボチャを薄切りにして乾燥させていた。



奥会津の 美術館 資料館

やないづ縄文館



縄文のエネルギーが迸る自由で立体的な装飾と 縄目文様が融合した“会津タイプ”の土器が出土

生き生きと自由自在に、複雑かつ立体的な装飾が施された火焰土器。そして“縄文”の名の由来となった、縄目文様が施された土器。柳津町の石生前遺跡の出土品を展示している『やないづ縄文館』では、その両方の特徴が融合したユニークな土器を見ることができる。

石生前遺跡は只見川の河岸段丘上部の丘陵地に位置する、縄文時代中期から後期の遺跡だ。「火焰土器は縄文時代の中期中葉に、新潟県で作られました。一方、東北地方では縄目文様を多用する、いわゆる縄文土器が主流でした。石生前遺跡は口縁部付近が火焰土器のような立体的な装飾、胴部が縄目文様という、越後の要素と東北の要素が混じり合った土器が出土しているのが特徴です。この土器を“会津タイプ”と呼ぶ研究者もいます」と、柳津町文化財整理指導員の長島雄一さんが解説する。

縄文時代にそんな遠方と交流があったことに驚くが、長島さんによると南側は八十里越や六十里越、那須を越えてくるルート、北側は阿賀野川を通り、奥会津と新潟で人や物の行き来があったという。奥会津には石生前遺跡のほかにも縄文遺跡が多数点在しており、会津を中心に中通り以西で会津タイプの土器が出土しているのだそう。「奥会津は、東北と越後の文化の交差点です。関東や新潟経由で入ってきた北陸などの影響が見られる土器も出土しています」



1階展示室の中央には竪穴住居が復元されている。住居内の炉は、石生前遺跡の6号住居跡の「複式炉」を切り取って移設した本物だ

奥会津には、ほかにも縄文遺跡の出土品が展示されている施設があります。ぜひ見学して奥会津の縄文文化に触れてみてください。

奥会津博物館



縄文時代早期から 遺跡数が増えた奥会津

詳しくは
こちら



DATA

奥会津博物館

南会津町糸沢字西沢山3692-20
TEL:0241-66-3077
開館時間:9:00-16:00
開館時期:通年
休館日:12月~3月までの木曜日
(祝日の場合はその翌日)、
年末年始
入館料:大人300円、高校生200円、
小・中学生100円

標高が高く、寒冷地の奥会津地域では、温暖化によって縄文時代早期から遺跡数が増えたと考えられている。発掘された土器を、年表や分布図とともに解説。



柳津町文化財整理指導員
長島雄一さん

やないづ縄文館には土器も多数展示されています。その中には「石生系列」土器という、とてもきれいな顔をした、全国でも有名な長さ16cmほどの土器があります。この土器はある装飾品を身につけていますが、その装飾品とはいったい何でしょうか。

QUIZ

やないづ縄文館からの
クイズです！

答えを知りたい方は
やないづ縄文館へ

Go!

— 柳津町 —

越後の火焰土器と 東北の縄文土器が融合 “文化の交差点”奥会津の 縄文文化に触れる

かえん

DATA

やないづ縄文館

柳津町柳津字下平乙151 ぽっとinやないづ1階
TEL:0241-42-3511 (柳津町中央公民館)
開館時間:9:00-16:00
定休日:第2・4木曜日
入館料:無料
※長島さんの出勤は不定期なので事前に問い合わせを

詳しくは
こちら



火焰土器は紐状にした粘土を1本1本貼り、立体的で複雑な文様を作り上げている。多彩な造形美はまさにアートだ。土器のほかにも石器や土偶も展示されている

定住生活の証でもある会津最大級の土器を展示 時代とともに変化するデザインにも注目

石生前遺跡は昭和62年と平成7年に発掘調査が行われ、土器、石器、土偶など数万点が出土しており、そのうち61点が福島県の重要文化財に指定されている。「37の住居跡が見つかっており、大規模な集落があったと考えられます。同時期の遺跡と比べ、大型の土器が多く出土しているのも特徴です」と長島さん。館内に入ってすぐ右手に展示されている会津タイプの土器は直径約60cm、高さ80cm以上あり、会津最大級の大きさを誇る。「これだけ大きな土器を作るのは大変な技術。重量があり持ち運びは困難なので、家の中に据え置いて使っていたのでしょう。移動を前提としない、定住生活が定着していたことがうかがえます」

1階の展示室とあわせて見学したいのが、2階の土器収蔵庫だ。多数の土器が年代順に並べられており、時代とともに形が変化していることがわかる。「火焰土器が作られたのは縄文時代中期中葉の短い期間だけで、その後はシンプルな形になります。中期の終わり頃には寒冷化が始まって集落の数も減り、華やかな装飾の土器を作る余裕もなくなっていったからかもしれません」

土器収蔵庫は長島さんの在館時のみの公開だが、予約なしで整理作業の様子も見学できる。詳しい解説付きで奥会津の縄文文化の魅力により深く触れられるので、ぜひ立ち寄りたい。

金山町歴史民俗資料館



貴重な弥生時代の 再墓などを展示

詳しくは
こちら



DATA

金山町歴史民俗資料館

(道の駅奥会津かねやま「こぶし館」内)
金山町中川字上居平949-8
TEL:0241-55-3334
開館時間:9:00-17:00
開館時期:通年
休館日:年末年始
入館料:無料

金山町から発掘された遺跡を中心に展示。縄文土器や、弥生時代の宮崎遺跡から見つかった再墓で出土した土器などを、パネルや写真とともに紹介している。